『タウンニュース／小田原版』 平成20年1月26日（土）号

寄　稿

ゴミを活かす地域の仕組みを

おだわらを拓く力　加藤憲一

かとうけんいち：1964年小田原生まれ。小田原高校、京都大学法学部卒。経営戦略コンサルティング会社、民間教育団体、農業、オービックビル事務局長などを経て、現在有限会社あしがら総研代表。妻と子ども二人の4人家族。

私たちの生活が「持続可能」なものとなるかどうか、それを決める大きな要素のひとつが「ゴミ」です。

小田原市では、年間約8万トン以上のゴミが出ます。うち、家庭ごみが82％を占めます。また、ゴミのうち52％がいわゆる「燃せるゴミ」であり、この焼却灰は減少傾向にあるものの、18年度では8千トンが灰として残り、その57％は地域外へ搬出され埋め立てられます。小田原で出たゴミを小田原で完結的に循環させているとは言い難く、他地域の環境にも大きな負荷をかけています。

持続可能であるということは、環境面はもちろん、経済的にも、またそれを支える市民や行政の関わりやすさという点からも、無理なく続けられるものでなければなりません。小田原を含む1市3町では、たくさんのゴミを集め高温で燃やし続けるという広域ゴミ処理体制も検討中のようですが、正確な情報と、市民参加のしっかりした議論が必要なことはいうまでもありません。

各自治体の住民レベルで取り組み可能な、ゴミの総量を減らす取り組みの大きな柱の中に、リサイクルの徹底と、生ゴミの地域循環があります。その先進事例が、以下の2地域です。

山形県長井市。日本で初めて、地域内の家庭の生ゴミを集めて堆肥化し、それを地域の農家が利用して農作物を生産、その作物をまた地域の家庭が購入し、食べるという、「台所と田畑を結ぶ」地域循環＝レインボープランを成功させました。国の内外から注目を集め、生ゴミ循環のモデルとされています。

徳島県上勝町。人口2千人、その半分が65歳以上、面積の85％が急傾斜の森林という厳しい過疎の町が、環境と地場産業を柱に地域の活性化を進めています。その大きな柱が、「ゴミゼロ」への取り組み。町にはごみ収集車は走っておらず、町内に一箇所設置されているゴミステーションに町民自身がゴミを持ち込み、34分類に分けられ、資源化率は80％近くに達しています。

注目すべき両者の共通点は、「ゴミ」問題を素材にしながら、地域住民の主体性や自治を育て、次世代の子どもたちへの環境教育につなげている点です。

この2地域のリーダー（長井市レインボープラン・菅野芳秀さん、上勝町ゼロウェイスト・アカデミー・松岡夏子さん）のお話を、2月11日の小田原再生フォーラムで伺います。たいへん貴重な機会です。ぜひご参加を！（詳しくはHPをご覧になるか、事務所へお尋ね下さい。）

おだわらを拓く力
加藤けんいち後援会代表／飯田 和
小田原市栄町2-13-1-2F
TEL0465-21-5260
FAX0465-21-5261
http://www.katoken.info
加藤憲一日記 更新中！

ゴミが地域の資源に

2／11　小田原再生フォーラム開催

小田原が直面する様々な課題に答えを探す「小田原再生フォーラム」（㈲あしがら総研主催）。8回目は『ゴミを活かす地域の仕組み』をテーマに2月11日（月・祝）、小田原市民会館6階で開催される。時間は午後2時～4時半。参加費は1，000円。山形県長井市から菅野芳秀さん、徳島県上勝町から松岡夏子さんを招き、ゴミの資源化の最新事例を紹介する。問合せ・申込みは㈲あしがら総研☎（20）0575まで。